

第15回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



一般の部 優秀賞 受賞作品

『真っ暗闇の中で聞いた言葉』

愛媛県

芝 葵衣

芝 葵衣 (しば あおい)

私が初めて自傷行為をしたのは、小学六年生の時だった。

その時は、死にたいとか、自分を傷つけたいとか、そういつた負の感情でやったわけではなく、自分の体を使った、興味本位の人体実験くらいにしか思っていなかった。しかし、幼い私が作ったためらい傷を見た両親は顔面蒼白で、そのまま家族会議。小学校も大事をとって一週間休むことになった。当の本人である私は、『えー……、今年の校内相撲大会なら優勝できたはずだったのになあ……程度にしか思っていなかった。よく考えてみれば、ここまで既に、私の闇は姿を現し始めていたのかもしれない。』

それから数年。私は、高校生になり、同級生との友人関係のもつれから、本当に負の感情に飲み込まれて、日常的に自傷行為をするようになった。授業中は机の中に腕を隠して、カッターで。休み時間にはハサミを使ってトイレで。最初は痛かったり、ばれたくないと思ったりもしていたが、だんだん麻痺した私は、いくら傷つけても痛みもなくなつて、もう自力では自傷行為をやめられなくなっていた。家では家族の目があるので、皆が寝静まつてから自分の部屋に隠していたカッターで自傷し、翌朝、血だらけの腕を家族に見つかつて、カッターを没収され、またこっそりカッターを買い、自室に隠すのがルーティンになった。そんな私に、祖母はいつも「あんたの部屋の、大野くんが悲しむよ……」と言って泣いた。

私は中学に入学してから、同じ部活の同級生の影響で、国民的アイドルグループ・嵐のファンになった。特に一番好きなのはリーダーの大野智さんで、雑誌やCD、DVDなどを買い漁り、お小遣いの殆どを使って、全力で応援していた。

でも、正直、私の心の闇と、大好きな大野智さんは、別だった。いくら大野智さんのポスターだらけの部屋に居ても、自傷行為が止まることはなかった。私はついに、高校に行かなくなつた。

家にいる時は、寝るか、食べるか、パソコンをして時間をつぶすようになった。それにプラスアルファで、家族が気を遣つてくれて時々、散歩などに連れ出してくれた。母が仕事を休んで家に居る時間を作ってくれたおかげもあつてか、学校に通つてるときよりは、自傷行為をする時間は減つていた。行為が減つたおかげで、私は少しずつ相談室登校を始めた。

その頃に、SNSで、とある女性に出会つた。彼女も嵐ファンで、高校時代に不登校になり、現在は通信教育で大学に通つていた。彼女とは意気投合して、ネット上でよく話すようになった。そんな中、事件は起きる。相談室登校をしていたある日。目を離れた隙に、私は相談室の職員の机からカッターを持ち出し、耐え切れず自傷行為をしてしまったのだ。ちょうど、担任の教師と学年主任の先生と今後のことを話し合う為に学校に来ていた母に連れられ、急遽その足で、通院していた心療内科に向かい、そのまま精神科病院へ入院が決まつた。

精神科への入院の時、はじめは親元を離れた暮らしに少しわくわくもしたけれど、案の定すぐにホームシックになった。いくら家に帰りたくても、病棟の、電気錠の扉の向こうへすらひとりでは出られない世界。リハビリにもあまり参加せず、医療スタッフや他の患者ともうまくなじめず、ただ【食う・寝る・洗う】の日常動作をこなす日々の中で、『自分って本当に生きていいのだろうか……』と漠然と思うようになっていった。その頃には、積

み重なった自傷行為で、腕の傷も深くなり、家族にも、痕がみつともないから腕を隠すようにと言われていた。ただ自分がその場だけ楽になるためにしていた自傷行為は、何を生んだのか。これからこの痕はどうなる？ もし私にパートナーや子ども、大切なモノが出来たと、き、何て説明する？ 本来なら考えなくていい、色んなことを考えるようになった。さらに、一応、数人残した同級生の連絡先。毎日皆と学校で顔を合わせていた頃は鳴り続けた携帯電話も、まれに連絡が来たかと思えば、忙しい彼らの連絡はすぐに途絶えた。それらは、着実に私の自己否定を加速させた。このままじゃダメだ。そう思って、その頃活発に話していた、ネット上の友人に住所を聞き、文通の約束を取り付けたあと、私は自分の携帯電話を折って破壊した。

こうして、私の手から携帯電話という身近な外界が消えた。それは確かに不便だし、寂しい思いもしたが、そのおかげか、やっと、病院で顔を合わす人たちともうまく交流が出来始め、過ごす日々充実さを感じていった。(まあ、携帯電話を買い与えてくれていた両親には悪いが……)。

そして無事、ひとまずの入院期間、一か月が経ち、退院した。文通のほうも相変わらずで、勿論、通信教育で大学に通うあの子とも文通は続いていた。そんな彼女から届いた一通の手紙が、入院時から抱えたままの思いを忘れさせてくれるきっかけとなった。それは、私の大好きな推しである、嵐の大野智さんの名言を書いたものだった。その中の名言のひとつが、
“傷くらいあったほうがいい。生きた証じゃん。”だった。

間違って認識しないほしいが、この言葉は自傷行為を助長するものではない。自傷行為の痕や様々な要因によって自分の存在を否定し始めた私に、この言葉が、『自傷行為はよくない。だけど、私のこの痕は、ボロボロになるまで闘って、今日まで生きてきた証なのだ』と少しだけ、前を向かせてくれた。

それから、自傷行為の回数は格段に減っていった。私は闘って、生き抜いて、今此処に居る。この痕がその証明だ。そう分かったからだ。今現在、大野智さんは表立った活動をされていない。でもいつか、どこかで会えたら、伝えたい。

「私はあなたのおかげで、真っ暗闇を闘ってきた自分を、認めることができました」と。